

(論文内容の要旨)

1. 本論文の目的および特色

本論文は、“インド仏教からチベット仏教、ボン教への中観思想の展開”を、旧来の先行研究に最新の情報を補いつつ検証していくことを目的とする。

本研究の特色と独創性は、別々に扱われがちなインド、チベット仏教、及びボン教の中観思想史の展開を1つの流れで扱った点、そして、世界的に見てもほぼ未開拓なボン教の中観思想の解明に着手した点にある。

2. 本論文の構成

本論文は、以下の3点を柱として中観思想史研究を行う。

第1章：無自性論証の分類

第2章：二諦説

第3章：中観派区分

まず、中観派の主眼とするテーマは“空”の思想であるので、当然、[1] 無自性論証を整理する必要がある。また、“空”という究極的真実(=“勝義諦”)を“世俗”的言語でどう理解していくかという点で、[2] 二諦説が重要になってくる。さらに、どの世俗的立場に依拠しながら勝義を志向していくかという点で、論師ごとの立場は異なってくる。したがって、[3] 異なる立場の中観諸論師がどのようにグループ分けされていたかを理解することが重要となるのである。

本稿では、中観哲学研究において最重要と思われる以上の3つのテーマそれぞれについて、[1]インド仏教、[2]チベット仏教、[3]ボン教という3つの流れに沿い、1次文献を直接参照しながら思想史を概観していく。したがって、各章を以下の3つの節に分けて構成する。

第1節：インド仏教

第2節：チベット仏教

第3節：ボン教

さらに、本研究を進めるにあたり特に重要と思われる文献に関しては、シノプシス、校訂テキスト、試訳、索引などを資料として作成し、以下の通り、副論文として提出した。

資料1：ロントウン著『論理道解明』（略：RLKS）のシノプシス

資料2：RLKSの校訂テキスト

資料3：RLKSの試訳

資料4：RLKSの引用文索引

資料5：メトウン著『二諦論』（略：*bDen gnyis*）の校訂テキスト

資料6：*bDen gnyis* の試訳

資料7：ニャンメー著『二諦論注』（略：*bDen gnyis 'grel pa*）のシノプシス

資料8：*bDen gnyis 'grel pa* の校訂テキスト

資料9：*bDen gnyis 'grel pa* の試訳

3. 本論文各章における考察結果

第1章では無自性論証の分類、第2章では二諦説、第3章では中観区分を、それぞれ“インド中観派からチベット仏教、ボン教へ”という流れで概観した。全体的に言えることは、インド中観派は新たな区分や概念を常に構築していき、チベット仏教においては時代とともにそれらをより詳細に整理していき、ボン教においては、インド中観派の理論体系をチベット仏教の影響を受けつつも、各論師が自由にアレンジしていったといえる。各章における考察結果は以下の如くである。

【第1章】無自性論証の分類

[1] インド中観派では無自性論証を“4つ”と数える伝統と“5つ”と数える伝統とあったが、チベット仏教においては“5つ”と数える伝統が主流となる。しかし、11世紀のロンソム(11c)は“4つ”と数えている。また、13世紀前半のサキャパンディタも自らは“5つ”の立場をとりつつも、“4つ”と数える習慣が存在していることを言及している。14世紀後半のツォンカパやロントウン以後は、カマラ

シーラの『中観光明論』を典拠にして概ね“5つ”と数えるのが一般的である。このことから、後伝期の初期のチベット仏教においては、“4つ”と数える伝統が残っていたが、後代になるにつれて“5つ”と数える伝統が主流となっていた可能性が高い。また、“4大論証因”を提唱したアティシャの孫弟子であるトルンパが、自明のものとして“5大論証因”を提示していることは興味深い。

[2] インド中観派においては5論証因あるいは4論証因を名称とともに列挙するにすぎなかったが、チベット仏教においては論証因をグループ分けする傾向が生じる。主に以下の2つがベースとなる。

・タイプ(A)

- └ 離一多因・縁起因
- └ 金剛片因・破有無生因・破四句生因

・タイプ(B)

- └ 縁起因
- └ 離一多因・金剛片因・破有無生因・破四句生因

[3] ロントウンの時代になると、論証因の間に優劣をつける動きが生じる。さらには“タイプ(A)”と“タイプ(B)”を統合し発展した分類が生じる。

・タイプ(C)

- └ 縁起因（三段階目）
- └ 離一多因（二段階目）
- └ 金剛片因・破有無生因・破四句生因（一段階目）

【第2章】二諦説

[1:インド中観派]ナーガールジュナ(ca. 150-250)からブッダパーリタ(ca. 470-540)までの時代においては、あくまでMMKの二諦説を言葉通りに解説することに重点が置かれており、新しい区分や概念などの創設には消極的であった。バーヴィヴェーカ(ca. 500-570)以後、新たな二諦区分や概念が生じるようになる。ただし、インド中観派の各論師の二諦説はそれぞれ細部において異なるため、後代のチベットで言

われる所の自立派・帰謬派の区分により二諦説を明確に区分けすることは困難と思われる。例えば、後代のチベットではしばしば、自立派は異門勝義と非異門勝義の二種の勝義を認めると言われるが、瑜伽行中観自立派に位置づけられるシャーンタラクシタは主著 MA において二種の勝義の設定には消極的な態度を提示する。同様に、後代のチベットでは、自立派は実世俗と邪世俗の二種の世俗区分を提示すると言われるが、しばしば経量中観自立派に位置づけられるバーヴィヴェーカは邪世俗の設定をなさない。また、アティシャに至っては、帰謬派特有の“唯一の勝義”と自立派特有の“実世俗・邪世俗区分”を提示しているため、後代のチベット人たちの分類法にあてはめるのは難しい。

[2:チベット仏教] 以上のようにインド中観派においては各論師がそれぞれの二諦説を確立していったのであるが、チベットにおいては新たな二諦説の確立には消極的であった。代わりに、インド仏教における二諦思想史の整理が主眼とされた。ニンマ派のロンソム(11c)の時代にはまだ帰謬派・自立派の中観区分も成立していなかったと思われ、二諦思想史の整理もまだ簡素なものであった、サキャ派のサキャパンディタ(1182-1251)の時代には、比較的良く整理のされた宗義文献中において、四大学派の解説の流れに沿って学派毎の二諦説の解説がなされるようになった。しかしながら、サキャパンディタにおいては、中観派を細分した上で二諦説を解説するという試みはなされなかった。14 世紀のウパロサル(14c)の時代には中観派を自立派・帰謬派それぞれの二諦説を解説する形式がすでに存在していた。セラジェツンパ(1469-1546)以後、ゲルク派の宗義書が整備されるようになり、チャンキャ(1717-1786)に至って宗義書の詳細さは最高潮に達したと言える。チャンキャの宗義書においては、有部、経量部の 2 区分(経に従う経量部、論に従う経量部)や、唯識学派、中観派の 3 区分(経量中観自立派、瑜伽行中観自立派、帰謬派)についてそれぞれの二諦説が解説されている。以上のように、時代とともにチベットにおける二諦思想史研究は発展していったのである。

[3:ボン教] ボン教においては、インド中観派と同様、各論師が新たな二諦説を構築していった。二諦区分の大枠については、少なくとも以下の 2 つの伝統が存在し

ていたと考えられる。すなわち、[A]二種の勝義の設定に否定的な“メトウン流の二諦説”と、[B]二種の勝義の設定に積極的な“*Theg 'grel* 流の二諦説”である。このように、勝義解釈に関しては統一性が見られるが、世俗区分に関しては論師ごとに立場が異なり統一性を見出すのは難しい。この点はインド中観派に見られる傾向と等しい。また、“深遠なる語の勝義”(zab mo gtan gyi don dam)と“世間極成の勝義”(jig rten grags sde'i don dam)という2種の勝義と、“清浄世俗”(dag pa kun rdzob)と“不浄世俗”(ma dag kun rdzob)の世俗区分などは、ボン教文献で頻出する一般的な区分概念であるが、それらは仏教においては一般的でない。このように、大枠ではインド中観派の二諦説を継承しつつも、ボン教独自の区分や概念を構築していったのである。その点は、新たな二諦説を構築せずインド仏教の解説にとどまっていたチベット仏教とは性質が異なる。

【第3章】中観区分

インド中観派においても後期においてはすでに、ラクシュミー(11c前半)に見られるように“経量部中観”(mdo sde pa'i dbu ma)と“瑜伽行中観”(rnal 'byor spyod pa'i dbu ma)などの中観区分は存在していた。しかし、それらはあくまで簡素なものにすぎなかった。

一方、チベット仏教においては、中観区分が高度に複雑化していく。特に、“自立派”(rang rgyud pa)・“帰謬派”(thal 'gyur ba)の区分は、ニマタク(Pa tshabnyi ma grags, b. 1055)によって導入されたチベット成立の区分概念と考えられる。ヤクトウン(g-Yag ston Sangs rgyas dpal, 1350-1414)の時代には、“経量中観派”と“瑜伽行中観派”を“自立派”の細分とする中観区分の統合が行われていた。ポドンパンチェン(Bo dong Pang chen Phyogs las rnam rgyal, 1376-1451)の時代には、“形象真実派”(rnam bden pa)と“形象虚偽派”(rnam rdzun pa)が“瑜伽行中観派”の細分として提示されるようになっていた。ジャムヤンシェーパ(Jam dbyangs bzhad pa, 1648-1722)の時代には、“有垢派”(dri med pa)と“無垢派”(dribcas pa)が“形象虚偽派”の細分とされるようになっていた。この

ジャムヤンシェーパの区分は17世紀18世紀のゲルク派の宗義書において一般的な中観区分になっていた。19世紀のチベットでは、特定の宗派の教義にとらわれない無宗派運動が盛んになった。コントウル(Jam mgon Kong sprul Blo gros mtha' yas, 1813-1900)に見られるように、この時代にはさらに中観区分が発展していた。コントウルはまず、中観を“顕教中観”(mdo dbu ma)と“真言中観”(sngags dbu ma)に区分する。さらに“顕教中観”を“自空中観”(dbu ma rang stong)と“他空中観”(dbu ma gzhan stong)に区分する。“自空中観”は“自立派”と“帰謬派”に区分され、“自立派”は“経量中観派”と“瑜伽行中観派”に区分される。一方、“他空中観”は“瑜伽行中観派”と“勝義を確定する中観派”(don dam rnam par nges pa'i dbu ma pa)に区分される。また、“真言中観”は“生起次第と結びつく中観”(bskyed rim dang 'brel ba'i dbu ma)と“究境次第と結びつく中観”(rdzogs rim dang 'brel ba'i dbu ma)に細分される。以上のように、チベット仏教においては、時代とともに中観区分が高度に発展していったのである。

ボン教においてはテトゥン(Tre ston rgyal mtshan dpal, 14c)が中観区分を提示している。テトゥンは“自立派”・“帰謬派”の区分と、“経量中観派”・“瑜伽行中観派”の区分の統合を行っている。この中観区分の統合は、チベット仏教の側では、ヤクトゥン以前に辿ることが出来ない。

(論文審査の結果の要旨)

インド仏教に於て『般若経』の空の思想を哲学化した龍樹とその後継者達は中観学派と呼ばれ、「ものが空であること」或は「ものが本体(自性)をもたないこと」を種々の論証式を用いて論証しようとした。一方、空性または無自性性という真理(勝義)は本来言葉を離れ分別を離れたものであるはずなのにそれを論証するためには世俗的な言葉に依存する他はない、という矛盾を克服するために彼らは勝義諦と世俗諦という二諦説を種々な形で発展させた。このインドの中観論師達は、チベット人達によって、彼らが用いる論証式の形式によって帰謬論証派や自立論証派、彼らが世俗的にとる立場の違いによって経量中観派、瑜伽行中観派、世間行中観派などのさらに細部の学派に分類されている。本論文は、このような中観思想の発展の一端を、無自性性論証(第一章)、二諦説(第二章)、中観派区分(第三章)という三つの観点から考察したものであるが、従来の研究史を要領よく整理した上で多くの文献を駆使して新たな知見を付け加え、中観思想のインド・チベットに於ける発展の歴史を明快な形で論述することに成功している。また、チベット文献については仏教文献ばかりでなく、従来取り扱われたことのないボン教の文献をも視野に入れて考証を行っている点も注目に値する。

本論文が明らかにした新しい知見は数多いが、特筆すべきものに限っても、少なくとも次の三点を指摘することができる。

1. 従来断片的にしか取り扱われたことのなかった無自性性論証のインド・チベット文化域に於ける全体像を明らかにした点。無自性性論証には論証式の立証因の種類によって、離一多因、縁起因、金剛片因、破有無生因、破四句生因という五つの論証因が知られているが、インド仏教に於いてはその全てを用いる五論証因の伝統と、そのいずれか一つを省くか組み合わせるかによって四と数える四論証因の伝統との二つの伝統が存在したこと、一方チベット仏教に於いては五論証因の立場が主流となること、しかも、時代の流れと共に縁起因を最重要視するに至ること、しか

し、チベット仏教でも古派と呼ばれるニンマ派、さらにはボン教には四論証因の伝統が継承されていることが文献的に実証されている。

2. 二諦説を扱った第二章に於て、チベットのボン教文献の中はかなり発展した二諦論が紹介されていることを指摘した点。そして、それを確証するためにメトン・シェラブオッセル（1058-1132）の『二諦論』とニャンメー・シェラブギャルツェン（1356-1415）によるその注『二諦論注』の批判的校訂本と和訳注を副論文として提出したこと。これは研究史上初の試みであり高く評価されるべきである。

3. 中観学派の分類について、コントゥル・ロードターイエー(1813-1900)の『所知全遍』に紹介される、従来の研究史上全く知られることのなかった中観学派の分類を紹介した点。コントゥルは十九世紀にカム地方を中心に起る無宗派(ris med)運動の主導者の一人であり、他空説の信奉者であるが、彼の提示する中観学派の分類は、中観派の中に顕教と密教を融合し、自空説と他空説とを融合したユニークな分類であり、チベット人による中観派分類の最後期の局面を示していると言え、論者が多くの未開拓の資料を渉猟して得た成果の一つとして高く評価できる。

しかし、本論文にも不備な点がないわけではない。二諦の考察に際して、ジャムヤンシェパの『大宗義書』の考察が欠落しているのは大きな弱点である。また、多くの文献を扱い多くの論師の立場を比較するに際し、叙述が時として羅列的となり細部の吟味が十分尽されていない場合がある。さらに、ボン教文献を取り扱う場合、ボン教の目から見た仏教思想を述べているのか、ボン教の中に取り込まれてボン教自身の思想の一部になった思想を述べているのか、という点の峻別により細心の注意が必要である。しかしながら、これらの諸点はむしろ論者の今後の研究に期待すべき点であり、本論文自体の価値を著しく損うものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十一年二月二十日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。